

## 第3回長浜市未来創造会議 会議録

I 日 時 令和5年11月8日（水曜日）10時00分～12時00分

II 場 所 きのもと交遊館（長浜市木之本町木之本1118番地）

III 出席者 鵜飼 修委員（座長）

岩崎 博論委員 桐畑 裕子委員 北川 富美子委員

藤谷 法子委員 松井 善典委員

小出 篤委員 中川 香奈子委員 船崎 桜委員

【事務局】 未来創造部 中嶋部長

政策デザイン課 柴田課長、服部課長代理、山崎係長、野村主査

こども若者応援課 村崎局長、稲葉課長代理

デジタル行政推進局デジタル行政推進課 宮川局長

【オブザーバー】 中村隆一郎、千田貞之、平子宗太郎

## IV 内 容

### 1 開 会

事 務 局 開会を宣言

### 2 部長あいさつ

部 長 【部長挨拶】

### 3 議 事

(1) 地方創生推進交付金事業の効果検証について

事 務 局 資料3ページから5ページをもとに、令和4年度地方創生推進交付金事業の効果検証について説明。

委 員 ・東京長浜リレーションズ事業に関わっている。定量的な面では着実に伸びており、定性的な面での関係性構築も年々進んできていると感じている。

・長浜ピクニックベースで開催している若者の起業支援を行うイベントについても、参加者が増えており、輪が広がっていると感じる。

委 員 ・情報発信や関係人口ということ言えば、東京の「ここ滋賀」に行ったことがあるが、滋賀に関するものが揃っているアンテナショップなので、ここに行けば滋賀県に行かなくてもよいという感想を抱いてし

- まった。もっと、滋賀県の写真やアクセスを紹介するなど、情報発信の場としての活用を長浜市から提案してはどうか。
- 座長 ・ 立地は申し分ないところであり、交差点から見えていてインパクトも強いので、アピールするには良いところである。
- 委員 ・ 確かに、ここ滋賀は「お土産屋さん」という印象が強い。滋賀県に「行きたい」、「行かなければ」というきっかけにはならないように感じる。
- 委員 ・ 『続きは滋賀で』というように、動線を作ることができればいいと思う。例えば、商品の写真だけ置いておくとか。
- 事務局 ・ 「ここ滋賀」の情報発信機能については、課題と考える。  
 ・ ご指摘のとおり産品を買っていただく場所になってしまっており、2階に近江牛のレストランが入ってもらっているものの敷居が高いという声も聞く。活性化に関する意見は県へ伝えさせていただく。
- 座長 ・ 世の中に情報が溢れているのでよりインパクトが求められている。
- 事務局 ・ 滋賀県に来てもらえるような誘客促進として、ここ滋賀から歩いて5分の場所に「東京観音堂」を整備して本物の観音様を見てもらいファンを増やす取組みを行っている。それが、4ページのプロジェクトである。
- 委員 ・ こういった地方創生の事業で、長浜北部で変化があったかというと感じない。北部の方で何人の移住者がおられるとか、何か数字が見えると実感できる。
- 事務局 ・ プロジェクトの位置付けとして、「人を呼び込む」という点においては新型コロナの関係もあり、非常に厳しかったところがある。  
 ・ 「仕事をつくる」という点においては、例えばサテライトオフィスの整備、旧市街地のピクニックベースや浅井の野瀬、北部だと余呉の上丹生の3か所に整備された。上丹生には大阪の企業が来てくれている。  
 ・ 農山村振興では、森林マッチング推進事業を行っている。また、令和5年3月に「地域商社ながはま連絡協議会」を設立し、産物加工や販路拡大などによる地域資源の価値を高める取組みを行っている。
- 委員 ・ 田舎は地域資源が豊富なので、そういった点を生かしてほしい。  
 ・ 自然薯など、まちでは手に入らない作物も多く存在する。まちに売りにいく地元の方もおられるが、高齢になるにつれて続かなくなっている。持続できるような仕組みを行政で整備してほしい。
- 座長 ・ 学生の就職に係る地元の関心、誇りという点について、滋賀県立大学では、地域共生をテーマに滋賀県内を巡るツアーの企画をたてるという授業を行っている。滋賀県出身者もそうでない人も、そういった取組みのなかで、改めて地域の魅力を感じられている。学生は普段、そういったことに触れる場を持たない。半ば強制的に地域と触れる機会を作ってしまうことも効果的である。

- ・東京や大阪に出ていった人が帰ってくる率を算出してみてもいい、結構多いのではないかと思う。都会に耐えられなくなった方々を優しく迎え入れる仕組みなどを作ってみてはどうか。
- 事務局
- ・地域の「懐の深さ」をどうやって表現していくかは考えていく必要があるかもしれない。
- 座長
- ・モデルケースや事例の情報発信ができていないということだと思う。若者のチャンネルに合った情報発信をしていくことが重要と感じる。

(2)(3) 第3期長浜市定住自立圏共生ビジョンの変更及び

長浜市過疎地域持続的発展計画掲載事業の進捗状況について

- 事務局
- 資料6ページから9ページをもとに、第3期長浜市定住自立圏共生ビジョンの変更について説明。また、資料10ページから14ページをもとに、長浜市過疎地域持続的発展計画掲載事業の進捗状況について説明。
- 座長
- ・過疎の説明で最後に説明された予算の金額というのは、市の全体でどれくらいの割合になるのか。
- 事務局
- ・市の予算としては全体で500億円ほど予算がある。
  - ・過疎計画自体はハード整備がメインになっており、計画に記載している事業が令和4年度実績で17億円程度ということである。過疎地域での事業はその他にも多くある。
- 座長
- ・資料13ページの6番「子育て環境の確保、高齢者等の保健及び福祉の向上及び増進」について、令和5年度の予算が令和4年度から半減になっているのはコロナ関係か何かで理由があるのか。
- 事務局
- ・ハード整備が要因であり、年度間で増減が生じるという性質はある。ご指摘の部分では、大きなものとして、余呉の施設解体を行っており、8,400万円程度かかっている。
  - ・本日の議事については、地域振興に向けた考え方について議論をしていきたいと考えている。
  - ・過疎地域の“持続的発展”という言葉は最新の法律で出てきた言葉であり、以前は過疎地域の“自立”を目指すという考え方だった。全国的に東京など都市部以外は人口減少が進んでいるので、その人口減少の中でもどうすれば持続的なまちの維持ができていくか、という点が重要であり、そして一つのまちでは維持が難しいだろうという議論のなかで、広い圏域の中で都市を維持していく考え方が示されていると考えている。
  - ・定住自立圏としては1市2町合併時点での旧長浜市を中心としたエリアが中心市宣言をして、他の地域を周辺地域と定義しているが、旧町のエリアを意識したいわけではなく、役割分担というのは面的にする

必要があるということで課題の整理を改めてしているところである。

- ・定住自立圏や過疎の定義も含めて、質問や提案、意見があればいただきたい。

事務局 ・ これまでは単体で頑張っていこうというところがあったが、国の方針転換もあり、他の地域との繋がり、人的交流を生かしながら、人口減少の中でも持続的にやっていこうという考え方になった。これを長浜市に置き換えたときに、市内各地域や他市町とどのような連携ができればいいか、そのような視点でご意見いただければと考えている。

座長 ・ このまま次の議事「意見交換」に移って、そのなかで今の点についても意見をいただくことにする。

#### (4) 意見交換

テーマ：

定住自立圏構想における“周辺地域”（＝旧虎姫町、旧湖北町、旧高月町、旧木之本町、旧余呉町、旧西浅井町）において今後必要な施策・地域間ネットワークについて

事務局 資料2ページをもとに、テーマについて説明。

委員 ・ 人口減少を食い止めることが一つのKPIになっているが、現実的に全国的な状況も鑑みて、長浜市の人口だけが回復するという状況は考えにくい。

・ 昭和、平成のモデルと令和のモデルは違う。まだまだ昭和、平成のモデルが残っているところがあって、令和のモデルを新しく構築し直す必要があると考える。温故知新でないが、ヒントは地域にあって、大学の活動でも循環経済のヒントが余呉の中山間地域にあったというような発見もしている。

・ 今年も学生10数名に1ヶ月ほど長浜に滞在してもらって活動していただいた。その学生が、余呉には「結（ゆい）」という言葉があって印象深かったと感想を聞いている。「結（ゆい）」というのは、血縁的な繋がりではない近隣との繋がりのことと言うとのことで、例えばお風呂のもらい合いのようなことをしていた。豊かな繋がりの中なかで人は明治大正昭和の貧しい時代を助け合って生きてきたということである。その時代、人口もそんなに多くないなかで、それでも持続的になっていた。これからの若い世代の時代を考えると、こういった血縁とは違うレベルでの新しい繋がりを作っていけるかというのが課題だと考える。意識の高い方は積極的に繋がりを作っているが、市民全域にそういった新しい繋がりを作る流れは感じられないので、その点を行政支援も入れながら再構築するということはあるのかと思う。

・ 南長浜まちづくりのプロジェクトに関わっているが、南長浜地域ではまちづくりセンターと地域づくり協議会が活動的で、他の地域とは大

大きく異なっていることがわかった。理由は様々あると思うが、大きな違いとしてまちづくりセンターと地域づくり協議会の数の違いである。地協のあり方や仕組みが旧町によって違うという話も聞いている。ウェブサイトを見ると、地協は高月、余呉、西浅井に1つずつしかない。人口対比で地協を組織していくのは難しいという理論は分かりつつも、特に過疎地域では地協とまちセンの繋がりが弱いのではないかと考える。

- ・踏み込んだ話をすると、高月町には4校の小学校があるが、今後この4校が維持できるかという議論もあるなかで、統廃合後の学校をまちセンとして利用する、もしくは学校の空いているスペースをまちセンとして活用するなど、新しい小さな単位の地協の活動拠点とするなど、メッシュを小さくすることでネットワークを強化していくということは現実的にあり得ると考える。
- 座長 ・旧町の皆さんの愛着というのが、足枷になっているのかどうかということは気になる。他の町とはやりたくないとか。他の小学校区とはやりたくないとか、そういった問題は現実としてあるのか。
- 事務局 ・過疎計画を策定する際、過疎地域のすべての地協に2回ずつまわって意見交換している。その際、地協の仕事が大変で支える人が減っていくため、合併を進めていかなければならないのではないかという話を聞いており、地域をどのように活性化していくかという点において、課題感がより深刻な地域もある。
- ・一方で、若者にとって「好きなこと、興味のあること」で繋がりたいという思いがある場合に、“地域”という枠のなかでどう繋げていけるか課題である。デジタルで世界中が繋がる時代のなかで、逆にローカルにしたような考え方をどうやって構築していくか難しいところである。
- 委員 ・大変というならば、行政の支援でボランティアベースの人たちを支える必要がある。
- ・これから地域全体が高齢化で動けなくなることを考えると、自転車で集まれるくらいの距離にあることが重要になってくる。
- 委員 ・木之本でいうと、若い方が地協に入られて古民家で木之本映画祭をされた。しかし、なぜ古民家なのか、木之本スティックホールの方が便利ではという意見もあり、今はそちらで開催することとなった。せっかく若い方が古民家の魅力発信という意味も込めて企画してくれたので残念な面がある。
- ・世代交代も必要なのだと思うが、各々仕事をされているなかで負担が大きいのだと思う。
- 座長 ・若い人たちの方が地域に対する感性があることがある。

- 委員  
座長
- ・ 来られるアーティストの方も外からの視点で地域の魅力を言ってくれているが、世代が異なると理解できないこともある。
  - ・ 年配の人にどう伝えても理解してもらえないこともある。ゲリラ的にやるしかない場合もあるという感覚で私はやっている。
  - ・ 地域の環境や気候風土によって様々な特性があって、そういったものに価値を見出す感性をもっているのがアーティストの方々であると思う。そういった人にどれだけ自由にやってもらえるかが重要と感じる。
  - ・ ただし、重要なのは、若者に自由にさせるということではなく、“地域の価値に気づいていますか”という話である。そして、その価値を生かしてやるのかやらないのか。
- 事務局
- ・ 昔は青年団等、地域に暮らしていく中で入らないといけない若い人のコミュニティがあった。しかし、考え方として、絶対に入らなければならないものにみんな入りたいかと言われたら、そういう時代ではなくなっているように思う。地域ごとの若い人たちの集まりもだいぶ薄くなってきてしまっているの、ある意味新しい令和モデルのコミュニティのあり方みたいなものが必要と感じる。
- 委員  
座長
- ・ 地域おこし協力隊が活発に活動されていて発信力もあり、都市部から人も呼んでいただいている。しかし、世代の違いが原因で地域がそれを理解されないこともあるので、自分としては「地域の包容力が足りない」のかなと感じている。
  - ・ 通訳みたいな立場で市役所の人と間に立つと理解してもらいやすい。多賀町では実際にそういう方法を取っている。
- 委員
- ・ ある地協は、非常に成功していると思っていて、若い母親世代が中心となって色々なイベントをしている。放課後の子どもの預かりも自分たちでまわしている。自立はすごいことだが、属人的になってしまっただけでは持続が難しくなるので、モデルとなる場所に対して行政から支援が必要と感じる。
- 事務局
- ・ 女性が入ると話が明るい方向に行きやすいケースが多いとの声もある。もちろんお互いの信頼あってこそだが、リーダーとなる若い女性が男性たちを引っ張っていくぐらいの関係性ができていると、うまくいくようにも感じる。
- 委員
- ・ 周辺地域との役割分担という話があったが、市としてすでに考えている役割はあるのか。
- 事務局
- ・ 具体的な明文化はできていない。例えば病院の機能という話になると、公立や公的病院機能を公共交通で繋いでいく等のネットワーク化が考えられる。
  - ・ また、子育ての観点では、可能な限り地域ごとに幼稚園や保育園という機能が必要だが、人口が集まりすぎても足りなくても、どちらにせ

よ施設の課題が生じてしまう。

- ・生活の機能によって様々あるが、生活に必要なサービスがある一方で都市部に集中させるべきサービスがあり、概念的に整理しているものとイメージいただきたい。
- 委員  
・先日の高齢者福祉審議会では、日常生活圏域で長浜を10に分けておられたが、自分としては範囲が広いと感じた。日常生活圏域としてイメージするのは自転車で移動できる範囲だと考える。
- ・先ほどのまちセンや地協のエリア、医療で言うところの日常生活圏域、それぞれ定義が異なっており、このまま話を進めてもまとまらないと感じる。
- ・属人的に頑張るところは生き残るが、制度的に支えるようなところは消えていくと予想している。
- ・現代は、個人化していく社会、一家で一つのテレビを見る時代から家族バラバラでスマホを見る時代になった。過去に遡る必要はないが、制度的に共同体をどう形成するかということについて、文化・歴史をどのように再発掘し価値づけていくのか、先人たちが守ってきたことをどう復興していくか。“人依存でやる”、“場所があるからやる”、両面あると考えられるが、個人的には拠点づくりのデザインを統一した思想で進めなければならないと感じる。
- ・例えば、まちセンを建て替えるにあたって、まちセンだけでいいのか、診療所は、保育施設は、など議論が必要だと考える。今後、ファシリティマネジメントでかけられるコストが減少してくるなかで、拠点となる駅やバス停に公共施設を集約・複合化していき、そこに動線を作っていくなど、今後100年の議論が必要である。
- ・そういった場所があるから仕方なしに集まる時代と、そこを盛り上げる人がいて守る時代というのが交互に来るような形で「人依存」と「場依存」という形でのデザインでやっていけるといいと感じた。
- ・周辺地域は生活拠点を複合化していくことが大事であり、中心地域では文化拠点を作っていくことで活性化できる。せめて圏域や建物の建て方に対するデザインや思想で今の意図が込められたものを作っていたらいいと思う。
- ・河毛駅あたりに大きな可能性を秘めた土地があるように思う。虎姫付近は家が密集していて、木之本はまちの賑わいと駅が近くて、このように駅ごとのテーマ性がある。今後、JRが続けてくれるか分からないが、縦の鉄道動線は必ず守るという設計は必要と感じる。
- 座長  
委員  
・具体的には、駅中心のコンパクトシティを形成するということか。
- ・最初は河毛駅にカフェを作るぐらいが限界かと思うが、それだけでも駅に来る理由ができて人も増える。そういった人依存で盛り上がると

- ころと、例えば、やまなみセンターのようなこれがないと地域が崩れてしまうといった commons の拠点として行政が守っていくところがある。インフラと何かの整合性を取った整備が必要と考える。
- 事務局 ・地域ごとの拠点として、国交省は「小さな拠点」の必要性を示している。都市としての大きな拠点と小さな拠点、そして生活圏域を結ぶネットワークの構築をしていこうというものであり、本市において整理が必要である。
- 委員 ・いくつかの小中学校区が今後統合していかなければならないが、各地協の歴史も古くて「隣には負けない」という盛り上がりもあるので、統合されるとアイデンティティクライシスを起こす可能性もある。
- 事務局 ・ある意味切磋琢磨する環境はいいのかもしれない。
- 座長 ・20年前こちらに来た時に、長浜、彦根、近江八幡という3つのまちづくりの先進地が並んでいるということがすごいことだと感じた。相互に意識してそれぞれの特性を生かしていくことが望ましいと思う。
- 委員 ・先ほど発言にあったように、段階的な拠点づくりというモデルを提示してみてもいいかもしれない。地域のボリュームに応じて拠点を設定してなど。
- 座長 ・現状、自然発生的に拠点ができているので濃淡がある。それは行政で整理できるのでないかと思う。既存アセットをどう使うか、空き家空き地になりそうなら使うなど中長期的な思考が必要である。
- 委員 ・基本的に鉄道というのは、地形などを考慮して無理な場所には引かれていない。つまり、基本的に地の利がある。
- 座長 ・木之本の旧駅舎に何か出来ないかと望んでいるが、使われていない。他にも開いていない建物が多くある。
- 委員 ・都市構造的に言うと木之本は結節点だと思う。結節点なりの特性を生かした使い方が模索できるというが。
- 座長 ・定住自立圏に関連して、市内と市外、県内と県外をどう結んでいくかという視点があって、思うところがある。
- 委員 ・高等教育の今後については大きな課題であり、市内で頑張るのか市外と連携していくのか検討が必要である。また、観光に来られる方の動線について、中心地域から周辺地域に来てもらうという考え方では県外から人を呼び込むときの選択肢が狭くなるため、直接周辺地域に呼ぶという考え方でもいいのかと思う。
- 委員 ・中学生や高校生といった若い子どもたちが集い、長浜で留まって暮らしてもらう方法と、長浜に入ってきてもらう方法について話し合う機会があった。
- 委員 ・隣近所の仲が良いのでこの地域が好きだと言っている子もいたし、学校で地域の文化を習った子もいたが、将来も長浜で暮らしてもいいと

言って手を挙げたのは1人だけだった。

- ・若い人が欲していることとして、「電車の増便」という意見や、そもそも浅井には電車もないという意見もあった。今あるものを大切にしてアピールをしても、今感じている不便という感情は消えない。
- ・また、今ある高等教育等に関する学校に魅力を感じなくて出ていきたいという意見が多くあった。例えば、市外から美容系の私立学校を持ってくるとか、子どもたちの希望にあった新しいものを作る必要を感じた。
- ・自分は余呉に住んでいるが、免許返納したくてもできない。暮らしていくには便利で、「結」の部分もありがたいことだが、風邪を引いたり熱が出たときにコンビニすらないし、駅も遠いし歩いていけない。
- ・外から長浜に来てもらうために必要なこととしては、魅力的な文化や自然の発信することや、地域にある何かをブランド化することが必要と考える。ブランド化するには繋ぎ手や発信する人たちの人材育成が必要と感じている。

座長

- ・そんなに不便なのか。逆に東京で1ヶ月くらい暮らしてみたらいいと思う。毎朝通勤電車に乗って生活すると、いかにこちらの生活が豊かなものか理解できる。年齢の関係もあってなかなかできないと思うが、こちらの豊かさを感じてもらう機会はあってもいいと考える。
- ・出ていくこと自体が問題なのではない。いつでも帰ってきていいという姿勢を感じてもらえるようにすればいい。

委員

- ・戻ってきた先に仕事を確保する必要がある。
- ・若い人たちに、長浜にはどういう企業があって、どういう人がいて、ということを知ってもらうことで帰ってくるきっかけになると考える。

座長

- ・都会でスキルを積んできた人が長浜で活躍できるように伴走支援してあげる人が必要で、そういうところに行政の仕組みがあるといいかもしれない。

委員

- ・Uターン組として感じることとして、長浜は移住者には優しいが、普通に引っ越してきて生活しようと思ったときに、ずっと住んでいる人前提のデザインが多すぎる。学校案内や行政からの通知も前提が分からないことがあってストレスを感じる。伴走支援しようというのであれば、初めて引っ越してきたお母さん目線で文章作ってるか確認する部署でも作ってはどうか。

座長

- ・例えばどのようなものが分かりにくいのか。

委員

- ・PTAの文章などは顕著である。「いついつ●●があります。よろしく。」のようなレベルで、どこに何を置いていけばいいかすらわからない。

- 委員
- ・18歳まで住んでいたはずなのに、社会人として戻ってくると情報の量や質が変わる。同じ移住者でもUターン者の方が躡く部分もある。
  - ・昨日はレンタカーで北部一帯を1日かけて周遊した後、古橋集落に宿泊し、朝方は集落内を1時間ほど散策して、非常に魅力のある地域だと感じた。
  - ・今回、木之本が会場ということで宿泊先を探したところ、相場が15千円程度（夕食なし・朝食あり）だったが、もっと高い価格帯にシフトできる魅力がある地域だと感じる。もちろん手頃な価格帯で泊まれる宿があることはありがたいが、わざわざ足を運ぶとしたら、この地域の魅力を十分に満喫した上でチェックアウトできたかどうかを重要視する旅行者も多いはずだ。一度に多くの人が押し寄せるような地域ではないため、一人の旅行者により多くのお金を落としてもらえるようなもてなしを考えるべきだろう。
  - ・お金を落としてもらうためには、魚を漬けたり、味噌を作ったり、畑から収穫したりして、自分が何らか手をかけたものを食べられたり、そういった集落の暮らしを体験できるようなアクティビティが必要ではないか。それにより泊数が長くなれば更に多くのお金が落ちる。背伸びをするのではなく、あくまで「自分たちの生活の範囲」でインバウンド型（外貨を獲得する方法）が相応しい。北部地域には観光リソースが散在しているので、泊数が長くなれば、様々な場所へ連れ出すこともできるようになるだろう。
  - ・雪に関しても同様のことが言える。長浜の人は雪が降ると人を呼びづらい感覚を覚えるかもしれないが、東南アジアなど雪が降らない地域に住んでいる人からすれば、雪景色や雪遊びは特別な価値である。そういった価値を訴求する際にデジタルマーケティングは重要で、現状、日本人向けのサイトと別に外国人向けのサイトを作っているところとないところがあるので、後者を支援するような取組をしてはどうか。
  - ・もう一つ、獲得した外貨を地域外に出さないようにする仕組みも重要で、例えば大手電力会社に電気代を払うのではなく、再生可能エネルギーを地産地消する、石油元売大手にガソリン代を払うのではなく、電気自動車の普及を進めるなど、このような地域においてこそ力を入れていく必要があるのではないかと。
- 委員
- ・友人の話だが、高校受験を控えた子どもたちのための塾が少なく、選ぶ余地がない。買い物においても限られたスーパーしかない、と言っていた。
  - ・人口が少ないから仕方ないという話かもしれないが、環境整備しないと外からは入りづらくなる一方だと感じた。
  - ・観光客を呼ぶということについては、人の目の触れるところに、目を

- 引く綺麗な風景などを出すと惹かれるものとする。全国的なCMに長浜の景色を出すなど、そういった取組みがあればと感じた。
- 委員
- ・連携について、国の文化庁の移転のように、市役所の機能を一部他の地域に移すことで、「行かざるを得ない」状況を作るという手も考えられる。
  - ・住みたいと思うためには、趣味と仕事の両立ができるかどうかが一番だと考えているが、地域行事が多すぎることから土日はすべて地域行事で、とてもじゃないが大変と感じてしまう。
  - ・デジタルの力を使って、「いま何に困っているか」という声を拾う必要があると考える。
  - ・自分は再三に渡り草刈りの問題を口にしてはいるが、自分の地域では2名程度のボランティアがほとんど草刈りをしている。そして、地域の人たちはそのボランティアがやっていることを知らない状況である。誰が草刈りをやっているか知ってもらうために地図上に見える化するなど思うことがある。そういうことにもデジタルの力を使ってほしいと考える。
  - ・コープ滋賀の活動で、「わたしの思いと願い」というものを集めて冊子にしている。見るだけで困りごとや意見が分かり、また、対応してもらった経緯も分かるようになっている。市の活動ももっと伝わるように広報されるべきだと感じる。
  - ・ホームページについても、「よくある質問」やランキングという項目があれば他のみんながどういったことに困っているか分かる。
- 座長
- ・趣味と仕事と余裕。時間的なゆとりがある生活がこの地域の豊かさだと考えている。
  - ・東京とは違うゆとりを確保できる仕組みがあるということ、いかにキーワードとして押し出せるかが重要と感じる。

#### 4 その他

- 事務局
- ・第3期総合戦略について、パブリックコメントが出た時点で戦略案を委員に周知する。

#### 5 閉会

- 事務局 柴田課長より閉会の挨拶

以上